

め専門家以外の読者は本文と対比して見る際多少苦痛を感じさせられる図もあるのではないかとということが懸念される。評者は最近「サイエンス」という雑誌を愛読しているが、それに挿入されている図は如何にもこなれており、その説明文も懇切丁寧に書かれている。解説書の図はそのようなものが望ましい。

ともあれ本書は、変化に富む世界の象気の特徴を、教科書には見られない生々とした筆致で綴り、しかも最新の話題までとり上げているので、一般の象気愛好家のみならず、専門の象気屋にとっても興味のある読物となっている。(山本義一)

故ハンス・エルテル教授を偲んで

理論気象学および地球物理学の分野で世界的な指導者であった Hans Ertel 教授が亡くなりました。享年67歳。

エルテル教授はその生涯を通じて、理論流体力学の問題を取扱われ、特に気象学、地球物理学への応用に取組んでこられました。その中でも特に、乱流、大気擾乱、大気大循環、大気熱力学、力学を基礎とした天気予報といった分野ですぐれた研究をなされました。

海洋学、水文学、一般的な宇宙物理学の問題に対する貢献もすぐれたものでした。

これらの重要な理論的研究は、おもに“Acta Hydrophysica”, “Gerland Beiträge zur Geophysik”, “Monatsberichte der Deutschen Akademie der Wissenschaften zue Berlin”などに発表されました。著書としては「気象力学の方法と問題」^{*}、「演算子計算法の地球物理学への応用」, 「気象辞典」の理論気象学の項目などがあります。最近(1972年)彼の名著「気象力学の方法と問題」がリプリントの形で出版されたことは大変うれしいことです。

これら全ての、270以上にも及ぶ彼の著作のなかで、とくに「エルテルの渦および渦位保存」^{**}の法則は世界的に有名であります。

気象学および地球物理学のあらゆる分野で行われたエルテルの沢山の業績は大変すぐれており、そのことによっても彼の名は学界誌に永久に残っていくことでしょう。

世界的に評価されているエルテルの科学的業績をたたとえると同時に、ここで彼の研究組織に対する創造性ということもべる必要があります。エルテルは種々の定期刊行物、例えば、“Időjárás”, “Pure and Applied Geophysics”などの編集長または編集委員でありました。ベ

ルリン科学アカデミーが、「水文学および気象学における文献集」を出版できたのも、エルテルの努力のおかげであります。また科学アカデミー以前の「物理水文学研究所」はエルテルの指導のもとで、世界的な名声を獲得しました。

エルテルは、彼の長大な科学的仕事により、しばしば賞讃されてきました。世界の科学界は、エルテルの死によって、偉大な理論気象学者、地球物理学者を失ったのみならず、不出世の最も重要な科学者を失ったともいえましょう。

エルテルの名声は、卓越した科学者として、また真の学者として、永久に科学史の中にその名を記されることでしょう。W. Shröder (Geophysikalische Station)

編集部注

* 第2次世界大戦中に、日本でも正野重方訳「気象力学の方法と問題」の形で出版され、この本によって日本の研究者は多大の影響をうけた。現在の理論気象力学の基礎ともなった名著である。

** 1950年代には、長波に対する傾圧不安定波などの理論が提唱され、現在の数値予報、大気大循環の基礎が確立した。このような長波の取扱いについては、渦位保存の法則

$$\frac{d}{dt} [(2\Omega + \nabla \times \mathbf{V}) \frac{1}{\rho} \nabla \ln \theta] = 0$$

(Ω : 地球の自転の角速度, \mathbf{V} : 速度ベクトル, ρ : 密度, θ : 温位)

が基礎方程式になったが、Ertel は Rossby とは独立にはじめて上式のことを論じた。第2次世界大戦後、日本では上式は Rossby の提唱という形で紹介されてきたが、国によっては上式は Ertel の名をつけてよばれている。ともかく現在の近代気象力学の基礎をつくった第一人者であることは間違いのない。